

アルティメット選手の心理的競技能力について

第五報

～女子 World All Stars と HUCK の比較～

瀧澤寛路¹⁾・村本名史²⁾・笹川 慶³⁾・栗田泰成⁴⁾・森 友紀⁵⁾

On Psychological Competitive Ability of Ultimate Players

The Fifth Report

～ Comparison of Ultimate Female Players in World All Stars and HUCK ～

Hiromitsu TAKIZAWA Morifumi MURAMOTO Kei SASAKAWA
Yasunari KURITA Yuki MORI

要 旨

本研究の目的は、アルティメット^{注1)}の女子 World All Stars^{注2)}「以下 WAS と略す」及び、HUCK^{注3)}を対象に「心理的競技能力診断検査 (Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes. 3) 以下 DIPCA.3 と略す」を実施し、心理的競技能力の違いを明らかにすると共に、アルティメットにおける競技能力向上の為の資料を作成することである。

WAS における DIPCA.3 の総合得点の平均値は 188.36 点であり、一方、HUCK の平均値は、175.00 点であった。総合得点の平均値において、WAS は HUCK に比べて有意に高かった。

また、DIPCA.3 における 5 因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の 4 因子の平均値では、WAS が HUCK と比較して有意に高かった。

さらに、DIPCA.3 における 12 尺度においても、忍耐力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性という 6 尺度の平均値では、WAS が、HUCK と比較して有意に高かった。一方、勝留意欲の平均値では、HUCK が、WAS と比較して有意に高かった。特に、WAS が、忍耐力は高いのにも拘らず、勝留意欲が低いという結果は特徴的であった。

Abstract

The purpose of the current study was to compare the psychological competitive abilities of Ultimate female players. The teams compared were the World All Stars (WAS) team, which is composed of top foreign players, and the HUCK team of Japan. This was done to collect basic data for the improvement of competitive ability. The mean total score on the Diagnostic Inventory for Psychological Competitive Ability 3 (DIPCA.3) was 188.36 for WAS and 175.00 for HUCK, which represented a statistically significant difference. When comparing scores of the 'five factors', it was evident that the scores of WAS players were higher than HUCK players in 'mental stability', 'concentration', 'confidence', 'strategic ability', and 'cooperation'. Examination of the 'twelve scales' also showed significant differences between the groups, with WAS members demonstrating significantly higher scores in 'endurance capacity', 'fighting spirit', 'confidence', 'decision-making', 'predictive capability', 'judgment', and 'cooperation'. Conversely, mean total scores on the 'motivation to win' scale were significantly higher in HUCK players. We specifically focused on the findings that 'endurance capacity' scores were significantly higher in WAS compared to HUCK, despite the 'motivation to win' results observed.

1) 常葉大学経営学部経営学科 2) 常葉大学健康プロデュース学部心身マネジメント学科 3) 上智大学文学部保健体育研究室

4) 常葉大学健康科学部静岡理学療法学科 5) 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科

はじめに

アルティメットは、『1チーム7名からなる2チームが、100m×37mのコート内でフライングディスク^{注4)}をパスにより運び、相手エンドゾーン(ゴール)内で味方からのパスをキャッチすれば、ポイント(1点)となるディスク版のアメリカンフットボール。スピードや持久力、ディスクのスロー技術、チーム戦術等、フライングディスクのあらゆる要素が集約されることから、ULTIMATE(究極)と呼ばれる。』²⁾

近年、我国におけるアルティメットチームは大学生を中心に増加の傾向にあり、『今年度(平成30年度)、日本アルティメット協会に登録しているチームは、男子部門に大学生と社会人を合わせて155、女子部門に同じく111、男女混合のミックス部門には同じく25、満33歳以上の男子マスター部門に9、満30歳以上の女子マスター部門に3、さらに、性別不問・小中高生を対象としたユース部門に19であり、合計すると322チームである。』²⁾

また、第一報⁹⁾で述べた様に、『アルティメットの日本代表チームは、諸外国には体格差では劣るというハンディキャップを、スピードとスロー技術、チーム戦術等で補い、国際大会において、現在までに数々の好成績を挙げている^{注5)}。』

『その一方で、我国においてアルティメットの認知度は未だ乏しく、ニュースポーツ、マイナースポーツと云われて久しい。現行では、アルティメットは発展・普及の途上にあると思われる。しかしながら、アルティメットはラグビーやサッカーにも決して引けを取らない激しさと高い競技性を持ち合わせているスポーツである。』⁹⁾

『すなわち、プレーヤーの体力、技術、チーム戦術のみならず、当然、メンタルコントロールも重要なスキルとなる。しかしながら、アルティメット選手を対象としたメンタル面への科学的なアプローチはほとんど見当たらないのが現状である。』⁹⁾

そこで、筆者ら⁹⁾は、第一報にて、アルティメット選手を対象として、徳永らが開発したDIPCA.3を実施し、アルティメット選手の心理的競技能力を性差に着目し、以下の様な結果を得ている。

男子アルティメット選手におけるDIPCA.3の総合得点の平均値は、184.06点であり、一方、女子は、177.85点というものであった。DIPCA.3を開発した徳永¹⁴⁾が示唆する様に、『総合得点の平均値は、男子が女子を上回るものとなった。』⁹⁾

また、先行研究においては、村上ら⁵⁾が行ったアテネオリンピック出場選手(種目は明らかにされていない)における総合得点の平均値は、男子が191.40点、女子

が181.96点であった。一方、立谷ら⁸⁾が行ったソルトレークシティー、及び、トリノ冬季オリンピック代表選手(共に種目は明らかにされていない)における総合得点の平均値は、ソルトレークシティーでは、男子が186.9点、女子が171.3点、トリノでは、男子が177.3点、女子が171.2点というものであった。

以上のことから、第一報⁹⁾で述べた様に、『アルティメット選手の心理的競技能力は決して低くはない』と云えよう。

また、DIPCA.3における5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子において、男子選手の平均値が女子選手と比較して有意に高く、協調性においては、女子選手が男子選手と比較して有意に高かった。

さらに、DIPCA.3における12尺度においても、自己コントロール能力・自信・決断力・判断力の4尺度については、男子選手の平均値が女子選手と比較して有意に高かった。

先行研究において、徳永ら¹³⁾は、DIPCA.3の各因子に関して、『性差については、内容的には、男子は作戦能力、自信、競技意欲、で優れ、女子は自己実現意欲や協調性で優れ、精神の安定・集中では顕著な差は認められない』と述べている。パイアスロン競技選手を対象とした佐川ら⁷⁾も、『精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性において、男子が女子よりも、有意に高いこと』を報告している。また、小笠原ら⁶⁾も、『自信、作戦能力の因子については男子が、協調性の因子については女子が有意に高い』ことを報告している。

以上のことから、第一報⁹⁾で述べた様に、『アルティメット選手の心理的競技能力は、先行研究における他の競技スポーツとほぼ同様な因子得点の傾向を示した。』

一方、徳永¹³⁾は、『近年のデータから、男子は判断力、自信、予測力、決断力、闘争心、自己コントロール能力で有意に高い値を示した。ただ、女子は自己実現で有意に高く、協調性でやや高い傾向がみられた。そして、勝利意欲や集中力には顕著な差は認められなかった』とも述べている。また、前述したアテネオリンピック出場選手における性差の比較では、『男子は、闘争心、自信、決断力、予測力、判断力の6尺度について有意に高く、女子選手は、協調性においてやや高い得点を示している』⁵⁾というものであった。さらに、本間¹⁾は、女子種目であるシンクロナイズドスイミングの日本代表選手の協調性が顕著に高いことも報告している。

従って、『男女共に、上位の尺度であった、闘争心や協調性等は、アルティメット選手の心理的特徴である可能性を示唆していると考えられる。』⁹⁾

以上の様に、第一報⁹⁾では、『男子アルティメット選手は女子選手に比べて、緊張を強いられる場面であって

も、安定したパフォーマンスを発揮してゲームを的確にコントロールでき、女子選手は男子選手に比べて、協力的で相互に尊重し合うことが明らかになった。』

次に、筆者ら¹⁰⁾は、第二報にて、競技歴が異なるアルティメット選手を対象として、同じくDIPCA.3を実施し、以下の様な結果を得ている。

アルティメット競技歴5年以上の選手におけるDIPCA.3の総合得点の平均値は、187.11点であり、一方、5年未満の選手における平均値は177.37点というものであった。総合得点の平均値は、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手と比較して有意に高かった。従って、『競技歴5年以上の選手は、5年未満の選手に比べて、心理的競技能力が高いことが考えられる。』¹⁰⁾

また、DIPCA.3における5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子の平均値では、競技歴5年以上の選手が5年未満の選手と比較して有意に高かった。

さらに、DIPCA.3における12尺度においても、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力という7尺度の平均値では、競技歴5年以上の選手が、5年未満の選手と比較して有意に高かった。

先行研究において、徳永¹⁷⁾は、DIPCA.3の各因子に関して、『大会参加回数が多い選手ほど、精神の安定・集中、自信、作戦能力で優れている』と述べている。一方、学生ソフトテニス選手を対象とした古谷ら³⁾も、『中学校以前に競技を開始した選手が、高校、あるいは、大学から開始した選手に比べ、男女共に、競技意欲、自信、作戦能力、協調性において、有意に高い』ことを報告している。また、女子ハンドボール選手を対象とした檜塚ら⁴⁾も、『5因子全てにおいて、競技経験が長い選手が有意に高い』ことを報告している。

さらに、徳永¹⁷⁾は、『経験年数が10年以上にもなると、多くの試合に参加し、その体験から、試合場面で必要な心理的能力を身につけていることが推測されます。このことがキャリア（経験）の差ということでしょう。例えば、ここは「耐えなければならない」という時に忍耐力を発揮出来るということです。試合の場で生じるいろいろな場面で、それが必要とされる時に、必要な能力を発揮できるということです』と述べている。

以上のことから、第二報¹⁰⁾では、『競技歴5年以上の選手は、5年未満の選手に比べて、緊張を強いられる場面であってもリラックスしてパフォーマンスを表現し、また、失敗を恐れず、自信を持って、ゲームをコントロールでき、さらには、冷静で落ち着いたプレーをコンスタントに発揮できることが推察された。』

また、筆者ら¹¹⁾は、第三報にて、2016World

Ultimate Guts Championship「以下2016WUGCと略す」において、出場26カ国中、4位に入賞した女子日本代表選手、並びに、5位に入賞した女子オーストラリア代表選手を対象にDIPCA.3を実施し、以下の様な結果を得ている。

DIPCA.3における5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子の平均値では、女子オーストラリア代表選手が女子日本代表選手と比較して有意に高かった。一方、競技意欲の平均値では、女子日本代表選手が女子オーストラリア代表選手と比較して有意に高かった。

さらに、DIPCA.3における12尺度においても、忍耐力、自己コントロール能力、リラックス能力、自信、決断力、予測力、判断力という7尺度の平均値では、女子オーストラリア代表選手が、女子日本代表選手と比較して有意に高かった。一方、勝利意欲の平均値では、女子日本代表選手が、女子オーストラリア代表選手と比較して有意に高かった。

従って、第三報¹¹⁾では、『女子オーストラリア代表選手が、忍耐力が低くはないのにも拘らず、勝利意欲が高くはないということが明らかになった。』

また、筆者ら¹²⁾は、第四報にて、2016WUGCにおいて、出場31カ国中、準優勝した男子日本代表選手、並びに、3位に入賞した男子オーストラリア代表選手を対象にDIPCA.3を実施し、以下の様な結果を得ている。

DIPCA.3における5因子の中でも、精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子の平均値では、男子オーストラリア代表選手が男子日本代表選手と比較して有意に高かった。一方、競技意欲の平均値では、男子日本代表選手が男子オーストラリア代表選手と比較して有意に高かった。

さらに、DIPCA.3における12尺度においても、忍耐力、リラックス能力、決断力、判断力という4尺度の平均値では、男子オーストラリア代表選手が男子日本代表選手と比較して有意に高かった。一方、闘争心と勝利意欲の平均値では、男子日本代表選手が男子オーストラリア代表選手と比較して有意に高かった。

第三報¹¹⁾における女子オーストラリア代表選手と同様に、『男子オーストラリア代表選手も、忍耐力が低くはないのにも拘らず、勝利意欲が高くはないということが明らかになった。勝利意欲が高くはないという傾向は、日本人選手には見られない特徴的なスキルである可能性が高い。』¹²⁾

そこで、本研究では、さらに、海外選手と日本人選手を対象にDIPCA.3を実施し、心理的競技能力における違いを明らかにすると共に、アルティメットにおける競技力向上の為の資料を作成することである。

方 法

対象者

「WAS」11名(年齢 27.18 ± 9.18 [18 ~ 34] 歳)、同じく、「HUCK」13名(年齢 28.70 ± 10.30 [23 ~ 39] 歳)。

調査期日

WASは平成30年3月に実施し、HUCKは平成30年4月に実施した。

調査方法

徳永らが開発したDIPCA.3を用いて実施した。尚、WASには、DIPCA.3の英語版を実施した。

DIPCA.3は、スポーツ選手が、パフォーマンスを発揮するために必要な心理的競技能力を診断するものである。

心理的競技能力を、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子と規定し、さらに、各因子は、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性の12尺度から構成されている(表1)。

また、12尺度の具体的な内容は表2の通りである。

検査は、48の質問項目、並びに、回答の信頼性を判定する4項目(Lie Scale)、合計52の質問構成となっ

ている。

各質問に対する解答は全て、1. ほとんどそうでない(0~10%)、2. ときたまそうである(25%)、3. ときどきそうである(50%)、4. しばしばそうである(70%)、5. いつもそうである(90~100%)の5段階に分けられており、被験者は最も自らに当てはまる番号を選ぶというものである。番号はそのまま得点となり、12の尺度が各20点となっており、総合得点は240点満点となる。尚、Lie Scale(20点)が、12点以下であれば、信頼性が乏しいと判断し、診断を回避する。

分析方法

DIPCA.3の採点、得点判定、プロフィールの作成は、徳永¹⁵⁾の手引書に従って行った。

まず、5つの因子において平均値と標準偏差をWAS、並びに、HUCKで求め、両チームにおける平均値の差をウェルチのt検定を用いて分析した。次に、12の尺度においても両チームの平均値と標準偏差を求め、同様にウェルチのt検定を用いて分析した。

結果並びに考察

まず、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子得点について検討した。集計した各心理的競技能力の5因子を比較したものが表3である。

精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の4因子

表1. DIPCA.3における心理的競技能力の因子および尺度

5 因 子	12 尺 度
競 技 意 欲	忍耐力・闘争心・自己実現意欲・勝利意欲
精神の安定・集中	自己コントロール能力・リラックス能力・集中力
自 信	自信・決断力
作 戦 能 力	予測力・判断力
協 調 性	協調性

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」p. 8 (株)トーヨーフィジカル出版部 2009

表2. DIPCA.3における心理的競技能力の12尺度の具体的な内容

1. 忍耐力	がまん強さ、ねばり強さ、苦痛に耐える。
2. 闘争心	大試合や大事な試合での闘志やファイト、燃える。
3. 自己実現意欲	可能性への挑戦、主体性、自主性。
4. 勝利意欲	勝ちたい気持ち、勝利重視、負けず嫌い。
5. 自己コントロール能力	自己管理、いつものプレイ、身体的緊張のないこと、気持ちの切りかえ。
6. リラックス能力	不安、プレッシャー、緊張のない精神的なリラックス。
7. 集中力	落ち着き、冷静さ、注意の集中。
8. 自信	能力・実力発揮・目標達成への自信。
9. 決断力	思いきり、すばやい決断、失敗を恐れない決断。
10. 予測力	作戦の的中、作戦の切りかえ、勝つための作戦。
11. 判断力	的確な判断、冷静な判断、すばやい判断。
12. 協調性	チームワーク、団結心、協調、励まし。

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」p. 12 (株)トーヨーフィジカル出版部 2009

については WAS が HUCK に比べて有意に高いという結果となった。

また、WAS における DIPCA.3 総合得点の平均値は、188.36 点であり、一方、HUCK は、175.00 点というものであった（表 4）。総合得点の平均値において、WAS は HUCK に比べて有意に高かった。WAS の平均値は、我国のオリンピック男子代表選手に、また、HUCK は女子代表選手に匹敵する程のものでもあった。

WAS のアルティメット競技歴は、11 名中、10 年以上の選手が 8 名、5～9 年の選手は 3 名存在していることから、これらの選手達の長い競技経験が結果に影響を及ぼしたことが推察される。

さらに、表 5 は DIPCA.3 における総合得点の判定表である。WAS は 4（やや優れている）であり、HUCK は 3（もうすこし）の判定だった。

表 3. 2018 WAS と 2018 HUCK の 5 因子得点における
平均値と標準偏差、並びに因子別プロフィールレベル（1～5）

5 因子	2018 WAS (11 名)			2018 HUCK (13 名)			t 値
	平均	標準偏差	レベル	平均	標準偏差	レベル	
競技意欲	62.73	6.74	3	62.46	7.15	3	0.09
精神の安定・集中	47.18	8.08	4	44.54	5.17	3	4.86***
自信	35.09	3.45	5	24.23	4.94	3	6.32***
作戦能力	31.55	3.45	4	23.85	5.03	3	4.43***
協調性	18.91	1.14	3	17.54	1.94	3	2.15*

*: p < 0.05, ***: p < 0.001

表 4. 2018 WAS と 2018 HUCK の 12 尺度における
得点の平均値と標準偏差

12 尺度	2018 WAS (11 名)		2018 HUCK (13 名)		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
忍耐力	17.55	1.57	16.00	1.68	2.32*
闘争心	17.82	1.54	17.00	2.55	0.97
自己実現意欲	16.27	2.57	14.92	2.36	1.33
勝利意欲	11.09	3.96	14.54	2.40	-2.52*
自己コントロール能力	16.55	2.42	15.00	2.27	1.60
リラックス能力	14.82	2.40	13.15	3.46	1.38
集中力	15.82	3.95	16.38	1.80	-0.44
自信	17.55	1.97	11.85	2.91	5.69***
決断力	17.55	1.69	12.38	2.36	6.21***
予測力	14.91	2.91	12.00	3.21	2.32*
判断力	16.64	1.43	11.85	2.12	6.57***
協調性	18.91	1.14	17.54	1.94	2.15*
総合得点	188.36	13.96	175.00	12.53	3.72**

*: p < 0.05, **: p < 0.01, ***: p < 0.001

表 5. 心理的競技能力総合得点の判定表

判定	1 (かなり低い)	2 (やや低い)	3 (もうすこし)	4 (やや優れている)	5 (非常に優れている)
男子	1 4 1 以下	1 4 2 ~ 1 6 4	1 6 5 ~ 1 8 6	1 8 7 ~ 2 0 9	2 1 0 以上
女子	1 3 1 以下	1 3 2 ~ 1 5 4	1 5 5 ~ 1 7 8	1 7 9 ~ 2 0 2	2 0 3 以上

出所：徳永幹雄：「T.T 式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」

p. 1 2 (株) トーヨーフィジカル出版部 2 0 0 9

この理由として、『優秀な選手、試合中の心理状態が優れている選手、実力発揮度が高い選手は、総合得点が高い』という徳永¹⁵⁾の指摘の通り、WASは各国のA代表選手であることから、アルティメットにおける競技水準が高い選手達であったことが考えられる。

さらに、DIPCA.3における12尺度においても、忍耐力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性という6尺度の平均値では、WASが、HUCKと比較して有意に高かった。一方、勝利意欲の平均値では、HUCKが、WASと比較して有意に高かった。特に、WASが、忍耐力は高いのにも拘らず、勝利意欲が低いという結果は特徴的であった。

第三報¹¹⁾、第四報¹²⁾において、男女オーストラリア代表選手からも同様の結果を得ていることから、勝利意欲が低いという傾向は、海外選手の特徴的なスキルである可能性が示唆された。

最後にDIPCA.3の12尺度の得点順位について検討した(表4)。また、図1は両チームの尺度別プロフィールである。

まず、WASにおける12尺度の得点順位は、1. 協調性、2. 闘争心、3. 忍耐力、3. 自信、3 決断力であった。一方、HUCKにおける得点順位は、1. 協調性、2. 闘争心、3. 集中力、4. 忍耐力、4. 自己コントロール能力であった。両チーム共に、協調性、闘争心、忍耐力の3尺度が、1位から4位までにランクされている。

図1. のプロフィール表でも協調性、闘争心、忍耐力

の3尺度が両チーム共に外側に近いことは、アルティメット選手の特徴が示唆されていると思われる。

おわりに

本年3月静岡県富士市富士川緑地公園で行われた、「アルティメットドリームカップインフジ」第20回記念大会には男子WASも招待されていることから、第六報では、男子WASと文化シャッターバズバレッズ^{注6)}との比較を試みるつもりである。

謝辞

本研究に際しては、次の方々に格別な配慮を賜りました。ここに氏名を記して深甚の感謝を捧げる次第です。
日本アルティメット協会会長 本田 雅一氏
同プロデューサー 梅原 貴正氏
(株)クラブジュニア代表取締役 吉田 昭彦氏

注1) アルティメット

ゲーム開始前に、オフenseとディフェンスを決め、各々のエンドゾーン内に横一列に並び、ディフェンスチームからのスローオフでゲーム開始となります。スローオフ前には、どちらのチームともゴールラインより前には出られません。両チームとも相手のエンドゾーンがゴールとなり、オフenseチームは、味方同士のディスクのパスで攻撃を展開していきます。その際、ディス

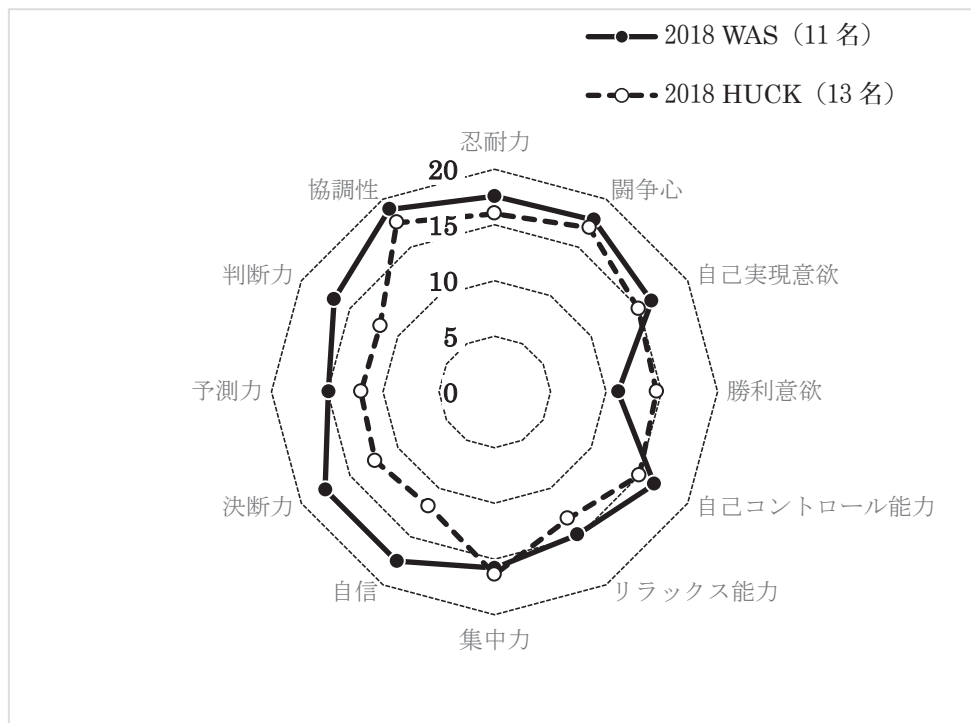


図1. 2018 WAS と 2018 HUCK の尺度別プロフィール

クを持っているプレーヤーは歩くことができません。ディスクを保持したプレーヤーが軸足を移動したり、歩いたりするとトラベリングという反則になります。パスしたディスクが地面に落ちたり、アウト・オブ・バウンズとなった場合(ラインから出た場合)、または、ディフェンスチームのプレーヤーにインターセプト、あるいは、パスカットされる、ストーリングアウトになる(マーカーはスローワーの3m以内の位置についた時点で「ストーリング」とコールし、1秒間隔で10(テン)カウントを始める。スローワーは10の声が発せられる前にディスクを投げないとストーリングアウトとなる。)等がおきた場合などは、ターンオーバー(T.O.)となり、その場で攻撃権は、相手のチームに移ります。プレー中にディフェンスへの走路妨害が起こった場合は、ピックという反則になります。1点入るごとにコートチェンジを行い、前のプレーで得点したチームがディフェンスとなり、スローオフを行います。

(<http://www.japanultimate.jp/> 日本アルティメット協会より引用)

注2) World All Stars

2018年3月9~11日 静岡県富士市富士川緑地公園で行われた「アルティメットドリームカップインフジ」第20回記念大会に招待され、優勝した女子世界選抜チームである。

メンバー構成は、アメリカ7名・コロンビア3名・オーストラリア1名・カナダ1名、計12名である。

注3) HUCK

「アルティメットドリームカップインフジ」第20回記念大会では決勝でWASに敗れ準優勝。

関東地区を活動拠点とする女子社会人アルティメットチーム。日本体育大、大阪体育大、中京大、法政大、日大等の卒業生で組織される。2017年、全日本アルティメット選手権10年ぶり3回目の優勝。2018年は準優勝、現在までに多くの日本代選手を輩出している。

2018年World Ultimate Club Championshipでは第8位。

注4) フライングディスク

フライングディスクとはプラスチック製の円盤状のディスクのことで、一般にはfrisbee (Frisbee) という名称(アメリカ・ワムオー社製の登録商標)で呼ばれることもあります。フライングディスクの起源は、1940年代、アメリカのアイビーリーグの名門校であるエール大学の学生たちが、キャンパス近くの「frisbee・ベーカリー」のパイ皿を投げ合ったのが始まりと

いられています。その光景に興味を持った建築検査員のフレッド・モリソン氏が1948年、金属製のディスクを試作し、その後の改良で現在のプラスチック製のディスクが誕生しました。いまでは、材質に改良が重ねられフライングディスクの飛行性能は、最長飛距離「255m」、最高時速「時速140km」、最長滞空時間「16.72秒」ときわめて優れたものとなっています。

一般社団法人 日本フライングディスク協会によれば、『本協会が加盟している世界フライングディスク連盟(WFDF)の加盟・準加盟国は56カ国で、全世界における愛好者人口は約6,000万人、競技者人口は700万人に達するといわれており、1989年には、IOCが後援する非オリンピック種目の世界大会「ワールドゲームス」のエキジション種目となりました。そして、2001年8月に秋田で開催された第6回ワールドゲームスからは正式競技に採用されました。1995年には、国際スポーツ90団体の連合体であるGAISF*の正会員にも認められており、2013年にはWFDFがIOC(国際オリンピック委員会)に準公認団体として認められ、オリンピック種目化への第一歩を踏み始めました。その他、フライングディスクは、文部科学省をはじめとする様々な組織が主催する生涯スポーツ講習会に採用されており、1999・2000・2002・2003年にはNHK教育テレビの番組「テレビ・スポーツ教室」にも取り上げられ、スポーツとしての認識が高まってきました。(財)笹川スポーツ財団の「スポーツライフ・データ調査」によれば、フライングディスクの愛好者人口は約150万人に達しており、150校を超える中学・高校・大学などの授業にも採用されています。また、1996年からは全日本アルティメット選手権大会が文部科学大臣杯をいただく大会に認められました。』

* GAISF : General Association of International Sports Federation

国際スポーツ連盟機構。オリンピック種目以外の国際大会を主管する。

(<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用)

フライングディスク競技には、アルティメットを含め、公認されている10種目が存在する。

詳細については、<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会のHPを参照されたい。

注5) アルティメットの世界ランキングと日本代表の戦績

2018年1月の世界ランキングでは、日本は、1位アメリカ、2位カナダ、3位イギリス、4位ドイツ、5位オーストラリア、に次いで第6位である。

2016年イギリスで開催された、2016WUGCでは、メン部門が準優勝、ウィメン部門が4位、ミックス部門が6位、マスターメン部門が5位、マスターウィメン部門が4位であった。

2017年ポーランドで開催されたワールドゲームスでは、第5位であった。

また、2018年カナダで行われたU20 World Junior Ultimate Championshipsでは、メン部門が12位、ウィメン部門が6位であった。

出所：<http://www.japanultimate.jp/> 日本アルティメット協会

注6) 文化シャッターバズバレッツ

我国唯一の男子実業団アルティメットチーム。1999年から2016年まで全日本アルティメット選手権18連覇。現在までに数多くの日本代表選手を輩出。2018年全日本アルティメット選手権二年ぶりに優勝。2018年US Open 第5位。

文 献

- 1) 本間三和子：「シンクロナイズドスイミング日本代表選手の心理的競技能力」水泳水中運動科学 pp.1～9 12巻1号(2009)
- 2) <http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用
- 3) 古谷 学・谷口幸一：「学生ソフトテニス選手の心理的競技能力に関する研究」pp.29～38 九州体育学研究7(1)(1993)
- 4) 樫塚正一・伊達萬里子・田島恭江・田中美紀：「女子ハンドボール選手の心理的競技能力に関する研究～経験年数および大会参加経験別による比較～」pp.55～62 武庫川女子大学紀要48(2000)
- 5) 村上貴聡・今井恭子・菅生貴之・立谷泰久・石井源信：「アテネ五輪代表選手を対象としたメンタルチェックに関する報告」日本スポーツ心理学会第31回大会発表抄録集 pp.31～32(2004)
- 6) 小笠原義文・浅沼道成：「高校一流選手の心理的競技特性に関する事例研究～岩手県ミニ国体出場選手を対象に～」pp.173～183 岩手大学人文社会科学紀要No.58(1996)
- 7) 佐川正人・佐々木茂喜・小林 規・神林 勲：「バイアスロン競技選手の心理的競技能力の特徴」pp.1～8 冬季スポーツ研究1巻1号 北海道教育大学冬季スポーツ教育研究センター(1997)
- 8) 立谷康久・今井恭子・山崎史恵・菅生貴之・平木貴子・平田大輔・石井源信・松尾彰文：「ソルトレークシティ及びトリノ冬季オリンピック代表選手の心理的競技能力」Japanese Journal of Elite Sports Support vol. 1 pp.13～20 国立スポーツ科学センター(2008)
- 9) 瀧澤寛路・村本名史・栗田泰成・高根信吾・笹川 慶：「アルティメット選手の心理的競技能力について第一報」pp.29～37 常葉大学経営学部紀要第2巻第2号(2015)
- 10) 瀧澤寛路・村本名史・栗田泰成・笹川 慶・高根信吾：「アルティメット選手の心理的競技能力について第二報」pp.27～35 常葉大学経営学部紀要第3巻第2号(2016)
- 11) 瀧澤寛路・村本名史・栗田泰成・笹川 慶：「アルティメット選手の心理的競技能力について 第三報～ウィメンオーストラリア代表選手と日本代表選手の比較～」pp.59～69 常葉大学経営学部紀要第4巻第2号(2017)
- 12) 瀧澤寛路・村本名史・栗田泰成・笹川 慶：「アルティメット選手の心理的競技能力について 第四報～男子オーストラリア代表選手と日本代表選手の比較～」pp.51～61 常葉大学経営学部紀要第5巻第1・2号(2018)
- 13) 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東 健二・稲福 勉・斉藤 孝：「スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差、競技レベル差、種目差」pp.109～120 健康科学22(2000)
- 14) 徳永幹雄：「スポーツ選手に対する心理的競技能力評価の尺度の開発とシステム化」pp.91～102 健康科学23(2001)
- 15) 徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」pp.8～15(株) トーヨーフィジカル出版部(2009)
- 16) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニング～心理的競技能力の診断と強化～」p.28 大修館書店(2010)
- 17) 徳永幹雄：「同上書」p.53